

絵仏師良秀

はってん
発展 ②

絵仏師良秀

(宇治拾遺物語)

これも今は昔のことですが、良秀という、仏の絵をかく絵師がいました。ある日、良秀の家となりから火事が起こり、火は、風にあおられて、良秀の家にもせまってきました。良秀は、あわてて外へにげしました。家の中には、たのまれてかいていた仏の絵や、着物を着る間もなかった妻や子どもが、まだ残っていました。けれども、良秀は、それにかまわず、道の向かい側に立って、燃える家をじっとながめていました。火が、良秀の家に燃え移り、ほのおが勢いよく上がり始めました。人々が見舞いにかけて、良秀は、ときどきうなずいては、にやりと笑っています。

「なんということだ。気でもちがったのか。」

人々がたずねると、良秀は言いました。「気がちがってなどいるものか。わたしは、これまで、不動明王の背中のほのおを、うまくかけずにいた。今、本物のほのおが燃え上がるのを見て、ようやく、そのかき方が分かったのだ。これこそ、大もうけというものだ。」

その後、良秀がかいた不動明王のほのおの絵は、「よじり不動」とよばれ、人々から大いにほめられたということです。

1

良秀は、何の絵をかく絵師でしたか。



の絵

2

家が燃えているとき、良秀はどうしていましたか。

ア 家の中にもどって、絵を運び出した。

イ 道の向かい側に立って、燃える家をながめていた。

ウ 火を消そうとした。

3

良秀が、燃える家を見て笑っていたのはどうですか。

4

良秀は、どんな人物だと考えられますか。あなたの考えを書きましよう。